

# 首から下まひ 倉敷の牧野さん

首から下がまひし、口に筆をくわえて絵画や書制作する牧野文幸さん(45)は倉敷市田ノ上町の初個展「生きるよろこび」が10日から、同市中央の加計美術館で開かれる。16歳で頸椎を

## 初の個展 10日から加計美術館

傷め、19歳から筆を取って26年。「描くことは生きる」と話す牧野さんが一筆一筆に心を込めた作品約70点が、会場を埋め尽くす。(則武由)

海辺を走る2頭の馬。赤く燃える空を背景に、躍動する体が神々しい。こちらを見つめる猫の絵は、柔らかな毛並みが丹念に描かれ、温かい体温まで伝わってくるよう。作品は、生き生きとした生命力にあふれている。

牧野さんが大けがを負ったのは、1982年、天城高校2年のとき。水泳部の飛び込み練習でプールの底に頭をぶつけ、頸椎を損傷した。復学を目指して1年以上リハビリに励み、口で文字を書けるように猛特訓。1年遅れて高校を卒業する。



「駆ける」

# 筆くわえ絵画、書 26年

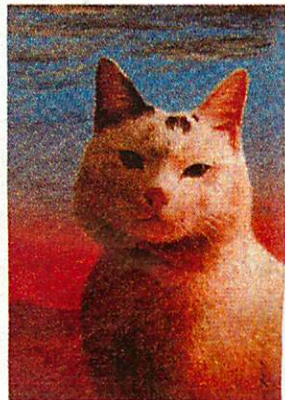


口に筆をくわえて書を書く牧野さん

しかし、待っていたのは静物画を描き上げた。飼は「食べて寝るだけの日々に。目標を見失っていた。見た動物などを次々に描いた牧野さんに、当時リハビリを担っていた平上二九三・吉備国際大教授が油絵を勧めた。倉敷市在住の画家丸山又史さんの指導を受けてみると、それまで絵画には関心がなかったのに、春先や秋でも5、6時間、口で文字を書く訓練が生きたのか、筆は自由に動いた。「ねっとりした絵の具の重さ、キャンバスに筆を置く感覚に夢中になった」

4カ月かかって最初の意味や価値を教えてください。夏や冬は1日3時間、春先や秋でも5、6時間、口で文字を書く訓練が生きたのか、筆は自由に動いた。「ねっとりした絵の具の重さ、キャンバスに筆を置く感覚に夢中になった」

## 生きる喜び込めた70点展示



「ねこ」資格を取得。国際団体「口と足で描く芸術家協会」以降と近作を中心に、第に所属し、協会の巡回展「命」に出品したり、グループ展も開いてきた。「絵を始めてから、いつでも動かせたら」と期待つか個展を開きたいと思つてきた」という牧野さん。月曜休館(7月18日は開館)。入場無料。6月25日午後2時からは、牧野も再開させた。2003年日本習字教育財団の正師範、04年には教授のた。

生への意欲は、子ども障害者の芸術活動を支援する加計美術館の福祉支援プログラムに申請し、今回の個展が実現した。会場には1990年代以降と近作を中心に、第に所属し、協会の巡回展「命」に出品したり、グループ展も開いてきた。「絵を始めてから、いつでも動かせたら」と期待つか個展を開きたいと思つてきた」という牧野さん。月曜休館(7月18日は開館)。入場無料。6月25日午後2時からは、牧野も再開させた。2003年日本習字教育財団の正師範、04年には教授のた。



### 紙と筆一定に 頭や首駆使

吉備国際大 野中研究員が動き分析



くわえた筆に墨を含ませる

「静」の文字。分析すると、頭の角度、首や口の筋肉の動きは書きたびに変化していたのに対し、筆の角度、筆圧といった紙と筆の関係は常に一定だったという。牧野さんが繰り返して書いた「静」の文字。分析すると、頭の角度、首や口の筋肉の動きは書きたびに変化していたのに対し、筆の角度、筆圧といった紙と筆の関係は常に一定だったという。牧野さんが繰り返して書いた「静」の文字。分析すると、頭の角度、首や口の筋肉の動きは書きたびに変化していたのに対し、筆の角度、筆圧といった紙と筆の関係は常に一定だったという。牧野さんが繰り返して書いた「静」の文字。分析すると、頭の角度、首や口の筋肉の動きは書きたびに変化していたのに対し、筆の角度、筆圧といった紙と筆の関係は常に一定だったという。